

季刊誌『Ultreia』創刊号より



<http://revue-ultreia.com/>

訳 山本紀志子
2015.07.25

伊勢神宮 永遠なる再生



Olivier Germain-Thomas — Florence Quentin

伊勢という土地は、神道の聖地のなかでももっとも聖なる場所である。20 年毎に、1300 年以上前からその聖域は壊されそして同じものが再び建設される神秘的な儀式、式年遷宮祭が行われる。最近行われたのは 2014 年の春であり、それは日本の祖先の価値観を我々に思い起こさせる機会となった。

三島由紀夫は、日本文化がオリジナルとそのコピーを区別しないことを評価していた。それは西欧が石を物質的なシンボルとしてきたのに対し、日本は木への執着を示してきたことを物語る。

この日本の作家の確言は、完璧にこの国の神道の聖域の中でも最も聖なる場所にあてはまる。それは伊勢志摩国立公園という列島の太平洋側に位置する。高い杉、楠、糸杉など何百年もの樹齢の木々に覆われた森の中、祈祷のための百を超える建物の中心に皇大神宮(内宮)があり、それは天照大神という太陽を司り、天皇家の神話的な先祖である女神に捧げられたもので、豊受大神宮(外宮)、豊受大神という天照やその他の神々のために伊勢の宮司たちが毎日捧げる食物を担う農業の女神と結び付いている。

20 年毎にこれらの建造物は、破壊と移動、そしてそっくりに作り替える対象となる。これは式年遷宮という名前の儀式として知られている。2013 年の秋から 2014 年の 3 月に

かけて、日本は 62 回目の 1300 年以上前から続くこの聖域の作り変えの儀式を行った。この機会に三種の神器とされる八咫鏡(神々の女神の聖なる鏡)なども共にうやうやしく、そっくりに作り変えられた内宮へと移される。月並みに言えば、この儀式はまた、ここに一切釘を使わずに木の栓だけで建築を組み立てる職人たちのかつての腕前を保持してゆくことでもある。それは先祖の世襲財産を後世に伝えて行く一つの方法でもある。それは比較文化論学者稲賀繁美が言うように、西欧の修復や保存論理の理解を越えるものである。

『伊勢神宮が物質的な伝達を負っているのは、思想的であると同じほどに大工たちの仕事に関しての同様な思想的な構想である。つまり 20 年の隔たりは、次の世代への技術の伝達にとって最良の方法でもあるということである。』

伝統によれば、伊勢神宮を再構築するということは、常にそれがオリジナルであるということである。『オリジナルはその命をコピーに写し変えることで伝達されてゆく。そして最新のコピーがこのようにしてオリジナルとなる。』高千穂神宮の宮司である後藤俊彦はこのように明らかにしている。西欧が考えるところの記念碑的性格を失った建造物は、遺跡という概念から外れたということであり、それは取り払われた以前の原型のコピーであり、その一つの引用として存在するということである。『オリジナルのない似たもの』、これはジャン・ボードリヤールの専門用語であり、また復元に更に近いことである。

神道信者にとって、恒久的でないということは自然の永遠の循環の表明である。生命を前にしたこの姿勢は、その力と美しさへの尊敬を表しているものでもあるが、この仮の、原始的な厳粛ではぎ取られた建築に適用される。またそれは伊勢神宮が世界遺産に登録されない理由でもある。無形の世界遺産という概念はこの特殊な場所にこそあてはまるものである。

ここには、大理石の円柱もフレスコ画も、また崇拜の対象である彫像もないが、神が宿る神聖な木によって魂を純化させ憩わせる場がある、そう宮司の後藤は言う。

Florence Quentin

神道の精髓



Olivier Germain-Thomas

崇められる太陽の女神、永遠を表す一つの思想、気がかりな幻影、それらは生への約束へと形を変える・・・一人の西欧人の沢山の思い出がことごとく、遷宮という儀式に参列する機会となる。

神道とは、自然と、さまよえる魂に崇拜の念を表す信仰とその習慣の長い間に亘る一つの萌芽である。この伝統は天地の創造と神々の繋がりを語る古事記と日本書紀に集められた神話体系によっている。この神々を私たちの文化における神々と混同してはならない。クロード・レヴィ・ストロースはこれらの神話の価値を、日本というモデルが彼に与えた魅力を分析することで検討してみせている。（「月のもう一つの顔」）彼はある時私にこう語った。

「もし私がアマゾンに惹かれることがなかったなら、日本の構造の複合性を研究することを望んだであろう。」

神々の中で最も重要な神となったのは天照で、それはその子孫が天皇家へと続く太陽の神である。古事記において最も重要な場面では、いかにして彼女が地に光をもたらしたかが語られている。彼女が素晴らしい業を数々行っている間、嵐の神であるその弟素戔鳴尊は稲田を破壊し火山の噴出物を辺りに広げて彼女を襲撃した。彼女は天の岩戸に隠れ、世界を暗闇で覆った。彼女をどうやってそこから出すか？ 八百万の神々がその解決法を求めて集まったが、何物も彼女を動かすことが出来なかった。芸能の女神である天宇受賣命がよい考えを思いついた。彼女はすっかり衣服を脱ぎすてて激しい踊りを踊り始めた。神々の笑い声に当惑した天照は、その岩戸を少し開けその哄笑の意味を探ってみようとした。ウズメは答えた。「今ここにはあなたよりもっと素晴らしい神がいるのです。だから私たちは楽しみ笑い踊っているのですよ。」そこで

他の神々がその岩戸の隙間に一枚の鏡をかざした。天照はそこにまばゆい一つの太陽を見たのだった。彼女の驚きの一瞬を利用して力の強い一人の神が天照を外へと引きずり出した。光は再び戻って来た。百年以上前から我々は神話に引きつけられている。それは危険を伴わない一つの刺激的な考え方である。一つの時代に支配的な考えによって神話をときほぐしたために、その源泉が生を豊かにする想像力や無意識の及ぼす力を、神話から奪い去るという危険が待ち受けている。神話の真髄とは、それを解放されたものに留めておくこと、また様々な姿を紹介することである。誰がオイディプスの神話を唯一つの糸口しかもたらさないと、またイヴの息子が唯一つの意味しないと信じているだろうか？

天照自身との和解

ある人々は天照が岩戸から出て来たのは、彼女よりさらに光り輝く女神への嫉妬であると解釈する。ひとつの神話を初歩的な心理水準に格下げすることは、それが何世紀にも亘って深い真理を証明してきたことの無知に他ならない。

私は別のことを試みる。天照は鏡に映った自分の姿の故に岩戸から出た。彼女はつまり自分自身のものである役割によって切望されているのである。蘇った彼女の姿は唯一のものでしかないゆえに、彼女は生の恩恵を与えるために自分自身と和解するのである。鏡の持つ象徴的な力は、日本の文化を豊穡にすることをやめない。

日本列島には天照を祀った何千もの聖域がある。それらの中で、125 は伊勢の聖地に点在しており、その広さはパリに匹敵し、すべての中で最も神聖な場所である。海に面し、森に囲まれた場所は、もう一つの日本を表し神話をとどめている。西暦 692 年以来これらの聖域の最も重要な神社は 20 年ごとに全く同じものに作り変えられ、今までの建物の横に建造され、また使い古された木たちは他の神社へと供給されることになる。

随分昔になる最初の参拝の折、私と友人の作家の竹本忠雄は東京への船に乗った。それは我々のうちに愛の女神として生まれるのを見た太陽の女神の構成要素にたどり着くためだった。夜になり日本人でいっぱい温泉に浸った。その波に揺られ水は水平を保とうとしていたが、屋根の右、左へと傾いていた。私たちは裸で打ち解けて話していた。

「わたしたちはあなたたち西欧の永遠という概念を誤解していた。」そうタダオは言った。

「金ぴかの新しい建物が過去の継続だと信じることは容易じゃないね？」

「あなたたちは古びた石を崇拝する。しかし私たちは違う。聖域は 12 世紀も前からずっと同じなのだよ。」

その時代の石は、その石を切った人の記憶をも保持している。」

「我々にとって記憶とは職人の変わることのない行為によって伝達されるものだよ。」
そして少しの間を置いて彼は言った。
「散って行く花びら一枚は、宇宙の秘密を知っているんだ。」

『移築』の年、遷宮

藁と金の色をした、はつらつとした新しい伊勢神宮は、色褪せたそれまでの建物の横に建てられる。それは2014年春に解体されることになっている。2013年10月2日の儀式は、その祭儀の頂点を表す。天照は新しい聖域に移される。その時何世紀もの時の流れは皺を刻むことがないので、まるで古の時と変わることなく宮司たちや職人たちの行列と共に進んで行く。夜6時、太鼓の響きが高位の宮司が古い聖域の扉を開けるのを告げる。夜8時、宮司たちは雄鶏の鳴き声と同じような声を三回あげる。それが出発の合図であり、夜が静寂に支配される前に松明と提灯でその夜をうがつ。こおろぎの声がして巨大な杉が空を覆っている。招かれた人々は黒い衣装を纏い、木の幹が不動であるのを真似るかのようにじっと動かない。静寂は日本の文化で貴重とされる無(vide)のこだまである。私の横にはタダオと富永重厚がいて、その場の精隋に適合する植物のリズムに調和していた。行列は古い聖域から社の柱となる木々の間の道を降りて行く。その時かすかな琴の音、神楽の歌声が響き亘る。職人たちの集団、その後には天皇の弟、そのお伴、そして宮司たちのながい行列が続く。その中には剣と弓を携える者もいる。提灯と松明はこの月のない夜に突然消える。それは女神のお通りのための紛うかたなき闇、女神は宮司たちによって運ばれる大箱の中に収められた一つの鏡によって表されている。その箱は地面まで届きそうな絹の衣に覆われている。女神は目に見えないというのが本質である。

能の革新者である世阿弥は我々にこのように警句する。

秘すれば花

秘せずば花なるべからず

己の前をって行くまさに生の起源の象徴を見ることは、我々の私である限界を取り除かせる。遠く左の上に、輿を覆う布が新しい聖域へと上る階段の前に到着する。この時静寂が女神を取り戻す。

タダオは、女神が出て行きそして新しい聖域に再び入って来た時、風の聖域から南の方へと一陣の風が経ち起こったことに注目した。日本人はそこに天の一つの兆しを見る事に何の困難さもないのだ。天皇と皇后とは東京の皇居に留まり祈りを捧げていた。

不思議なビジョン

儀式が終わり、私は夜の中五十鈴川という聖性の輝きに満ちた川へと歩いていた。天照の光が海へと導く水は、山々に分配される前に空へと放たれるために、せせらぎの単調な旋律と共に女神を私たちに見せてくれる。薄闇は、時折くすんだほのかな星の光を空に広げるそよ風のせいで、わずかに揺れる。目を閉じて座り水の息吹に私の呼吸を合わせる。私は暗い空間と、少しずつ膨らんで、一つ一つを結びつけて暗さを払いのけるような白い点々を眺めていた。白さが私の目をくらませるので、もっと目に優しい灰色をみつめる。ああ！ 光があふれますように！ 太陽の金色、竹の緑、くすんだ赤が私の目に入る。それは切り取られた一つの身体の熱い血のように噴き出す。まばたきもせずそれを他のエクリチュールに変えるために見つめる。聖母の青いガウンを想像することは不可能だ。それは私を自分のホームへと戻すもの。神道の神社が私によくもたらす不思議なビジョンの遠くにあるもの。どこからこの赤は来るのだろうか？

私はもう一つの存在を受け取る。軽やかで微笑むような。ゆっくりとした荘厳な動きで神楽を踊る巫女と呼ばれる若い処女たち、彼女たちがその優美さを捧げる神社に属する処女たちは、赤と白の衣装を纏っている。彼女たちの衣装の赤は、厳格な官能性と母性を呼び起こす。生への約束へとつながる川の不気味な赤を見る快楽。次いで白いかけらのちりばめられた黒へと戻って行く。それは目なのか？

「あなたはむしろ一つの道を探してるのでしょうか。」

「でも一つの道は一つの方向を示している。」

「それは簡単すぎるね。だから無駄だよ。自分自身で象徴の中から自分の道を見出すことだ。」

静かに！ 私は川の音と夜の音だけを聞くために腰をおろした。するとまた白のかけらたちが集まっていた。どんどん輝いてくる白、これまでになく耐えることのできない輝きしか残っていない時、目を閉じているとあらゆる意味が押し寄せてくるのを止めることができなかった。分かっことを停止させる一つの光が、過去を荒らしまわり未来を閉ざす。私は戻ることのできないあの場所へと私を運びさせないために、大地にしがみついた。思いやりのある大地は私の爪の間に入り込み、そして手の平に一つのメッセージを残す。

私は一瞬見失っていた連れを再び見出していた。時は何という遊技者だろう！

「言葉をそのままに言葉を夢見る」芭蕉の言葉である。

私たちが大地を苦しめ魂をおきざりにしたこの時の中、自然に結び付いた神道は、生という織物を形作る要素を集めるるつぼなのだ。儀式によって招きいれられた物質へと、今度は私たちが再生する番だ。分かっことはできない。人と宇宙があるのでなく、宇宙と共にある人間を再び見出すのだ。

魂の女神

2012年皇后陛下に歓迎された時、二人の会話はすぐに宗教的な問題へと向かって行った。私が被災地から戻った時だったので、私たちはまず津波の話題から話し始めた。私は被災された方々の勇気と身の危険にさらされながら自発的に原発の発電所に赴いて献身的に活動する人々への賞賛を語った。彼女は天皇と共にそれらの地に援助と励ましのために訪れていた。彼女は以下のことに非常に驚かれたと語った。

住民たちが壊れたそれぞれの住居に戻ることが出来た時、まずそこから持ち出すために彼らが探そうとしたのが、先祖の祭壇であったという。私たちは神道の重要性、日本人が自然に結び付いている神話について語り合った。その詩情は自然との一致に結び付いている。私は我々西欧人はこうした自然の神聖化をギリシャ時代、またはケルト的なものによって認識していると告げた。

「でもケルト的精神はあなたがたの中に何か残っていますか？」

そう皇后はたずねた。

「無意識の中に。神秘主義者、または詩人たちは、生きたものとしてそれを持ち続けてきました。アッシジのサンフランチェスコは、あらゆる自然の現象、その様を歌いました。」

私がそう言うと彼女の顔に笑みが広がった。

「彼は鳥にも話しかけました。何て素晴らしいことでしょう！」

彼女はそう言った。

「狼をも静めました。」

皇后は愛の力を知っている故に、何にも驚くことなくその話に魅了されていた。そして私はこう続けた。

「創造物への讃歌(太陽の讃歌)」の中で、彼は肉体の死を賛美しています。大地、水、火の姉妹である死をそれらと同じように。」

皇后は物思うために何も語らないでいたいのだろうと思った。彼女は皇后として嫁ぐために別れたその母のことを思っていたのだろうか？ 死のイメージは遠のいた。皇后は十字架のヨハネへの彼女の愛情を語った。その精神性が彼女にはとても身近なものだったのだろう。それから私たちはインドについて、またイスラム教神秘主義スーフィズムについて話した。神道の中心にあってその役割に忠実であり続けながら、皇后は魂の高揚を奨励するあらゆる宗教形態に広く心を開かれている。

「例え伝統などが違っていても心の深いところで理解し合うことができますね。」

頭を少しかしげながらとても穏やかに皇后はそう言われた。

後で彼女は私を見送ってくれた。階段の上で最後の別れに手を振る彼女を見ながら、彼女の放つオーラが、宗教が心の奥底の最も秘められたところで生き続ける一つの体験の証であると思った。彼女の微笑みは魂の女神を表現していた。

神道と仏教



Florence Quentin

日本の二つの宗教形態の関係は、今でも外国人を不思議に思わせる数々のエピソードの中に見て取れる。もし、今日この二つの宗教のが別々に見えるとしても、つまり神道はその神社、様々な宗派の仏教はその寺を持ち、片方は誕生や結婚式、祭礼に結び付き、もう一方は精神修養や葬式に結び付いているが、この明らかな住み分けは多くの競合を隠している。多くの日本人は、宗教的分離が我々の場合のように武器とまらない限り、ある時は神道であり、またある時は仏教徒である。それはこうしたことによる。明治時代まで(1868－1912)それは西欧化の始まりであり、天皇は自分に与えられた宗教を以て権威を確かなものとしたのである。日本人は陽気に諸教混合を実践していた。つまり神々と同様に仏陀、また菩薩など礼拝の場所へと赴いていた。神道が政治的に利用されるようになり、第二次世界大戦における軍部独裁という本来の流れからはずれて行った。幾世紀にも亘って、それぞれの宗教はその精髓をもたらした。神道においては神話との結び付き、太古の国の様子の描写、自然の力の神聖さであり、6世紀から9世紀にかけて中国、朝鮮から渡来した仏教においては、心霊のメカニズムについての一貫性のある分析と、そこから生ずる実現化への道である。神道が何よりもまず何も形而上学的考察のない実践として存在していたので、仏教の経典はもう一つの宗教の集大成とはみなされなかった。

日本は、豊穡な不可視のものへと向かう扉を開く二つの方法を調和させるという英知を持ったのである。

この不可視のものは、どんな場合においても密接に自然と結び付いている。

もし私に日本人の魂とは何かと尋ねたら、

敷島の大和心を人間はば、朝日に匂ふ山桜花

と私は答える。(本居宣長 1730-1801)

根源対根源

これまでにないシンポジウムが、24 人のフランス、日本の重要な人物たちの参加で伊勢において開かれた。これはその文化的、精神的価値についての意見交換をするためである。

鏡に映されたディスクール。 Florence Quentin

「無に戻るということはいつか再び生まれる定めにあるということである。ものごとの儚さに向き合うこの感情は、だからこそ実際的な変わることのない物体よりさらに貴いものなのである。」

伊勢神宮の周期的な遷宮に関しての建築家であり哲学者である Murielle Hladik による詳述された中心概念は、笹川日仏財団によって開かれたシンポジウム『根源対根源』の筋道をつけた。

12 人のフランス人の学識経験者、芸術家などがこの神道の高貴な場所で、日本人の宗教学者たちと集い、各々の文明の持つ文化的、精神的価値について意見を交換し合った。また同時に自分たちの内面的な生についても表した。

「フランス人と日本人は常に同じものについて語っているとは限らない。例えば『空』という言葉为例にとってみよう。この語は我々の語彙の中に同じ意味で移し換えることのできる言葉がない。『無』(néant)という言葉に翻訳するのは無意味だ。また『vide(空、空白)』にしても、驚くべき局面を連想させる。結局我々西欧人には『空』(vacuité)という体験を理解できないのだ。我々が理解するためには錯覚してはならず、他者の価値の中に分け入らなければならず、日本人にとってそのような概念に抱合されているものを通して日本を考える必要がある。」と作家の Olivier Germain-Thomas が強調したような言語の翻訳の難しさにも直面したが、こうした意味論的な不安はおいておくとしても、神道の専門家たちとキリスト教の専門家たちとのやりとりは、その奥深いものを見過ごすことはなく、アンドレ・マルローが「Intemporel(この世ならぬもの)」の中で指摘していることをよく例証することができた。

「アジアにとって永遠とは創造物の不安定さを強いるものである。キリスト教にとっては、この世に存在する旅人の行為は、至福かまたは不幸の永遠の中に組み込まれるものである。」

高千穂神社の宮司である後藤俊彦は「神々は自然を通して教えている。山と川は

我々の父であり母である。そして神道のヴィジョンがエコロジーと世界平和に貢献することを望む。」と語り、また西欧キリスト教歴史学の大家である André Vauchez は「キリスト教の聖域と日本の聖域を比較文化的考えという広い視野の中に捕らえる試みが必要だろう。」と述べた。しかし日本学者である Bernard Faure は、闇のゾーンを含む文化的、精神的な伝統の全ては、基本的には近代的な一つの体系である太古のある神道の過去の中に投影する危険があるとも促した。

フランスと日本の二人の美術史家は、それぞれの方法で芸術作品の役割(新たなまた伝統的な)を思い起こさせる図像を解説しながら、一致するビジョンを提示した。最初のものは、近代の雄弁な研究の一つであり、来るべき大惨事の予兆のレクイエムとも言えるもので、見捨てられたかつての神道の信仰の地を描いた小林清親の版画を分析しながら語られた。二番目のものは、禅の文化である山水画(中国の様式)を例としたあらゆる精髓についてである。それはまさに声のない詩を思わせる。その風景は、苦行僧が彷徨う精神世界でもあり、行き過ぎる雲、流れゆく川にも似ている。

現実と想像のオリент

「永遠の眼差しで世界を見る事」

このスピノザの言葉は、ベルトラン・ベルジュリーにより引用されているが、精神性と生命の息吹の間に存在する密接なつながりを発展させることを、このフランスの哲学者にもたらした。この生命の息吹とは「すべてを呼吸させることにあり、また自然との関係、人間との関係または神(キリスト教の神)との関係でもある。最期の息吹きについて宗教科学者の島水進が、日本人の来世信仰についての秘密を提示した。質問を受けた人の 15.9%の日本人があゝの世を信じていた。あるがままの死に向き合うのか、または死と和解するのか？ 日本人の伝統的な習慣から離れる事は、社会学者 Danièle Hervieu-Léger の詳細な分析につながるのである。彼女はフランスの精神的風景のパラドックスを指し示した。それは宗教から脱したけれども、今日では新たな精神的な再生の出現に直面している。

高橋和夫は18世紀スウェーデンの神学者スヴェーデンボルグの書簡を引用して驚かせた。バルザックは彼を北方の仏陀と呼んでいた。次いで充実した議論が歴史学者 Jean-Pierre Laurant によって続けられた。彼は秘術主義や秘教主義者(19世紀、20世紀)の想像のオリентという論文を発展させ、とりわけヨーロッパや米国のジャポニズムへの熱狂(または激しい拒絶)明らかにしてみせた。

最後に中国学者 Alexis·Lavis が、『人間たちが地球に住むために託された最も卓越した方法の一つ、祭儀と詩情を反映させ、丸山俊明が純粹倫理学の生の 17 の規則を示唆した。それは日本の精神的根源性の中から引き出されたものであるが、宗教的な教義、またはイデオロギーの埒外で実施されうるものである。最後に比較神話学者の

吉田敦彦が、天照という偉大な太陽の女神によって出会えた会議を締めくくった。天照は列島全体の守護と憐れみの象徴であり、また特にクロードルの表現を引用して「伊勢の聖なる森の象徴」として会議を終えた。

インタビュー 笹川日仏財団理事長 富永重厚

2011 年の震災以降日本は独特の質問を多く受けて来た。

—— 何故このシンポジウムの開催の第一歩を 3 月 11 日にしたのか？ これは伊勢神宮の式年遷宮に当たっている。そして東北震災の年から 3 年目にあたるのだが。

この大きな津波の後で私は多くの罹災者たちに出会ってきた。彼らの多くは、すべてを失い、福島原発の放射能拡散の危険にさらされている。多くの人々が「自分は一体何なのか？」という質問を己に問うている。こうした日本人の意識が私に衝撃を与えて来た。我々の国の再興の時が来たということなのか。今までは経済的発展のみに捕われ、その奥底の価値観から遠ざかって来てしまった日本の。確かに何十年間は日本は世界三位の経済大国の地位にあったが、それは北アメリカの消費社会のモデルを取り入れてきたからだ。しかしまた我々は我が国の文化の原初の特徴を失うことでもあった。日本は大きな船体に生まれ変わったが、それは方向を持たずに航行してきたのだ。我々は個人主義者の集団ではなく、共通の目的に沿ってゆくことが必要である。それ以来我々の視界は閉ざされている。

—— この容赦ない秩序回復への招集において、神道に固有の精神とそれを崇拝することが、多くの日本人の中にあると考えているのか？

それもあり得ると思う。私としては我々の神が日本の民衆に強い一つのメッセージを送っているのだと思う。「こんな風にして生きてゆくことはできない。」と。確かに我々は多くの死者のために涙を流した。しかし私の感情的意見は、この恐ろしい通告によって物質主義者として正常な航行を外れてしまった代価を支払ったということ。それは我々がもう一度精神的な側面を見出すためであり、それを再生させるためであり、かつて優

位だったものとは異なったものである。

—— 日本人はあなたによれば、その根源、聖なる憐憫に満ちた意味を持つ、その根源を失って、2011 年以降寺院や神社への道を見出したということなのか？

—— 2013 年の秋は 72 回目の伊勢神宮の式年斎宮の年で、それは太陽の女神天照を祀る神社である。1300 年前にさかのぼるこの古い儀式は日本人の精神性にとても重要な位置を占めている。他の年には 850 万人くらいの巡礼が 1 年に訪れるのに対して、この年の巡礼数は 1400 万にも及んだ。この現象は津波の結果によってとしか説明できないと思う。この津波は、我々の社会が精神的に衰退へと向かう危険に瀕していることを現実化したものである。我々の精神的な源泉に立ち戻ること、それがこの日以来強く訴えられてきているのだと思う。

—— あなたがこの日仏での対話を着手しようとしたのは、この精神においてなのか？

笹川財団を通して私は実際に様々な分野の専門家たちの出会いの場を作りたいと願った。この再生の地伊勢において。アンドレ・マルローは 1974 年にこの地を訪れ、彼の固有の言葉によれば、「根源に対する根源」という彼の願いを対話で表している。那智の滝でも、彼は霊的なと形容した体験をしている。しかしこのフランスの作家は、その切望したものが現実になる前に早く亡くなってしまった。それはかれの遺言でもある物事が、このシンポジウムで成就したということでもある。

我々の願い？ それは我々に突き付けられた質問に対する一つの答えのつかかり、浮かび上がることであると思う。それは今日、または明日、どのような精神的方向を日本を取って行くかという質問である。異なった領域の参加者たちによって交わされた対話は、各々がその相違をより充実させていく。言ってみれば、鏡を使った照明効果のようなものである。